

イロナシハナイロ ～ノミクヒソダッテ、ハハハトワラフ～

ノ
ミ
ク
ヒ
ソ
ダ
ッ
テ、
ハ
ハ
ハ
ト
ワ
ラ
フ

イロナシハナイロ ～ノミクヒソダッテ、ハハハトワラフ～

登場人物	・	パツとしない会社員
サイトウ	・	サイトウの上司
タナカ	・	サイトウの後輩
ヤマダ	・	栄養剤の販売員
ノビルン	・	栄養剤の販売員
グングン	・	栄養剤の販売員
コイワズ	・	栄養剤の販売員
レンレン	・	栄養剤の販売員
その他	・	観客、上役、取引先など

サイトウ、電話をしながら登場。

取引先が相手なのか、仕事の電話のようである。
うまくいっていない様子である。

サイトウ「あ、はい、そうですね、その件につきましては……、はい、はい。

いえ、まったくもってその通りです。はい……ええ……え？ あ、いやあ、それはちよつと上長に確認させていただければと思うのですが……。私では判断しかねると言うか、権限がですね……。ああ、はい。承知しました。では、また、こちらからお電話させていただく形で、はい、はい……。いや、そんなこと言わないでくださいよ。では、はい、よろしくお願いいたします」

サイトウ、電話を切る。

サイトウ「……くそ」

サイトウ、大きなため息。

ヤマダ登場。

ヤマダ「(非常にのんきに明るく) おつかれさまです」

サイトウ「あ、おつかれ」

ヤマダ「(調子よく) ん？ なんかつたんですか？」

サイトウ「……いや、例のさ」

ヤマダ「(察して) ああ、あの人？」

サイトウ「そう」

ヤマダ「(察して) ああ、めんどくさいですよねえ、(察して) 課長のところに行くんです？」

サイトウ「ああいうのが老害つつうんだよ」

ヤマダ「確かに」

サイトウ「(大きなため息をしながら) あああああ、めんどくせええええええええ」

ヤマダ「課長のところ、(行くんですか?)」

サイトウ「(うんざりしながら) 一応ね」

ヤマダ「適当にごまかしちゃえばいいじゃないですか」

サイトウ「いや、変なところから耳に入るのやだし」

ヤマダ「(半笑いで) 誰も気にしないですし、バレないですよ」

サイトウ「お前、変に図太いね。そんな風に教育した記憶ないんだけど？」

ヤマダ「いつも気苦労の多い先輩の背中を見て育ちましたから」

サイトウ「あ、そ」

ヤマダ 「何かかわいいポーズをしつつ」じゃあ、頑張ってください」

サイトウ 「少し照れて」頑張るようなことじゃねえんだよ」

ヤマダ 「哀れな目線を向けて」仕事って、そういうこと、ありますよね」

サイトウ 「すごく自信なさげに」あ、お前さ、今度の日曜日って・・・」

ヤマダ 「聞いてない」じゃ、頑張ってください!」

タナカ 入場。

ヤマダは退場する。

サイトウ、タナカに詰められている。

タナカ 「で？」

サイトウ 「いや・・・だから」

タナカ 「先方はなんて言ってるの？」

サイトウ 「まあ、途中まではこちらの先導で対応させてもらってたんですけど、急に態度が」

タナカ 「なんかやった？ あ、でもサイトウ君の場合、逆に何もなかったんじゃない？」

サイトウ 「何もしなかったってことはないですけど」

タナカ 「いいや、多分君はねえ——」

サイトウ 「(遮って) 僕のせいじゃないですって」

タナカ 「あん？」

サイトウ 「あ、」

タナカ 「私まだ喋ってんだけど？」

サイトウ 「はい」

タナカ 「私がしゃべってるときに自分の話するってどういうこと？」

サイトウ 「はい」

タナカ 「そうやって、人の話最後まで聞かないから取引先に逃げられそうになるんじゃないんですか？ ねえ——」

サイトウ 「(遮って) いや、それは、だから」

タナカ 「だから!」

サイトウ 「あ・・・。すいません」

タナカ 「(だんだんヒートアップしていく) あのさ、サイトウ君さ、そんなだからダメなんだって、昔から言ってるよね？ もう君とも付き合い長いけど、そういうところずーーーーっと直らないよね？ 直せって何度も言ったよね？ 私、ずーーーーっと言ってきてるよね？ ね？ それとも何かな？ 私の話を聞いているふりで、何にも聞いてないのかな？ それに君さ、謝らないよね？ なんで謝らないの？ これだけ怒られてるのに、すいませんの一言もないのは何で？ ねえ、私、謝るときはちゃんと謝らないとだめだよって、教えてきたよね？ ね

え？ 私の教育方針間違ってる――」

サイトウ「いや、あの、その、だから」

タナカ 「(激怒) だから――!!」

タナカ、退場。

サイトウ、一人しょげて落ち込んでいる。

サイトウ「(ため息)・・・はあ」

座り込んで、ぼんやりと空を見あげるサイトウ。

そこに、ノビルン、グングン登場。

サイトウの隣にごく自然に、挟み込むようにまるで知り合いかのように座る。

サイトウ「(ため息)・・・はあ」

ノビルン「(サイトウの気持ちを代弁するように、ただ、ものすごく嘘くさい)

なんでもうまくいかないだろう」

サイトウ「(ため息)・・・はあ」

グングン「俺、なんか間違ったことしたのかな？」

サイトウ「(ため息)・・・はあ」

ノビルン「いや、そうだなあ、俺が間違ってたんだろうなあ」

サイトウ「(ため息)・・・はあ」

グングン「でも、あんなに怒ることなくない？ そりゃあ、そりゃあ、俺が悪いのは認める

よ、認めるけどさ」

ノビルン「謝れたってさ、形だけではいくらでも謝れるよ」

グングン「でもそんなの嫌じゃん。俺、悪いって思っていないもん。俺のせいじゃないもん。

しょうがないじゃんね」

サイトウ「(ため息)・・・はあ、(販売員の存在に気が付いて)・・・あ？」

ノビルン「(勝手に続けて) わかった、これは愛情の裏返しなんだ、俺に対して愛を持って

接してくれているんだ」

グングン「そうだ、不器用な人なんだ、なんだ、そう思ったらかわいく見えてきたな」

サイトウ「ちょっと、」

ノビルン「今度、食事でも誘った方がいいのかな？ いや、そういうのは違うな、そういう愛情じゃないかもしれない、でも、愛があるならちゃんと言ってくれないと伝わらないじゃないか」

グングン「恥ずかしいのかな、そりゃあそうか、愛情って伝わりにくいものだもん。愛って、難しいな」

ノビルン、グングン、遠い目をする。

サイトウ「あの」

ノビルン~~と~~グングン「なかったかのようにはい？」

サイトウ「え……、どちらさま……？」

ノビルン「あ、私たちこういうものです」

ノビルン~~と~~グングン、名刺を取り出す。

反射的にサイトウも名刺を出す。

名刺交換。

サイトウ、名刺を見て。

サイトウ「……ビュテホーカンパニー企画開発部……」

グングン「間違えた。こっちです、こっち」

グングン、新しい名刺を渡す。

サイトウ、受け取って、

サイトウ「……(名刺に書かれた文章を読む) あなたの成長お手伝いします。

人生生育調整剤販売員」

ノビルン「ノビルンと」

グングン「グングンです！」

サイトウ「……はあ。あの、営業したいなら、本名の方がいいと思いますけど」

ノビルン「先ほどから拝見させていただいたところ」

グングン「あなたの人生がうまくいってないのではとお見受けしまして」

サイトウ「(何かを察して) あ、結構です」

サイトウ、立ち去ろうとする。

が、ノビルン~~と~~グングン、阻止する。

ノビルン「まあまあまああ」

グングン「お話だけでも……」

サイトウ「いや、マジでいいです。最近、十日に一回ぐらい、宗教とかマルチとかの勧誘受けるんで、どうせそんな感じでしょ？ この間なんて、すげえセクシーなシングルマザーの人とお茶行ったら、『あなたにはカリスマがある』の一点張りで、こ

「うちの話なんか聞きやしなくて、どれだけ惨めな気持ちになったか。カリスマあるように見えます?」

ノビルン「いや、全然」

グングン「心配しなくても見えないです」

サイトウ「でしょ?」

ノビルン「ただその代わり出てますよ」

サイトウ「何が?」

グングン「カモの匂いが」

サイトウ「(イラっとして) 勧誘するなら、もうちょっと考えた方がいいと思いますよ」

サイトウ、去ろうとする。

と、そこにヤマダ登場。

ヤマダ「あ、いた! 何逃げてんですか!?! トイレじゃなかったんですか!?!」

サイトウ「(課長は) 収まった?」

ヤマダ「戻ってきてもらっていいですか? 課長激おこなんで」

サイトウ「ああ、まだ収まんないのか」

ヤマダ「てかよく逃げてくれましたね」

サイトウ「トイレ行ってくるって言って。頭冷えるかなって」

ヤマダ「余計荒ぶってますよ。鎮めるために戻ってください」

サイトウ「嫌だなあ・・・」

ノビルン「お困りですね?」

サイトウ「ああ?」

グングン「お試しになりますか?」

サイトウ「何を?」

ノビルン「これ」

ノビルン、栄養剤らしき瓶を取り出す。

グングン「100%自社開発、信頼のおける国内製造」

ノビルン「効果は絶大、あなたの人生の調整と生育をお手伝いいたします」

サイトウ「いや、栄養剤でどうにか——」

ヤマダ「販促品でしょ? 多少気分が上がるかもしれませんがいいんじゃないですか?」

サイトウ「上がったところで、すぐに落とされるだけじゃねえか」

ヤマダ「(半笑いで) それでも、ほら、落下地点は上がりますから。軽傷で済むかもしれない」

サイトウ「面白がってない？ お前」

ヤマダ、ノビルンから栄養剤をとって、サイトウに渡す。

ヤマダ「さ、ググっと」

サイトウ、大きなため息をつき、栄養剤を飲み干す。

サイトウ「お、うま。」

ノビルン「でしょ？」

グングン「我が社の看板商品ですから」

ヤマダ「さ、行きますよ」

サイトウ「（ため息）」

サイトウ、ヤマダ、退場。

CM。

観客役が登場して盛大な拍手。

ノビルン「は～い、どうも皆さん！」

グングン「本日は人生生育調整剤の販促キャンペーンにお越しいただき、誠にありがとうございます！」
ざいます！！」

ノビルン「今回ご紹介するのはもちろんこちら！」

グングン、鞆から栄養剤を取り出す。

グングン「100%自社開発、安心の国内生産！」

ノビルン「効果は絶大、あなたの人生の調整と生育をお手伝いする！」
ノビ~~ル~~グン「人生生育調整剤ノビグンX！！！！！！」

観客役大げさなアクション。盛大な拍手。歓声など。

ノビルン「人生100年時代」

グングン「落着かない政治に社会情勢」

ノビルン「定年後に待っているのは安定した老後か」

グングン「それとも惨めな独居老人か」

ノビルン「目先のお金に手を出して失敗するか」

グングン「増えない貯金残高を見て絶望するのか」
ノビルン「先が見えない人生だからこそ、この、」

グングン「ノビグンX！」

ノビルン「ノビグンXを飲んで、人生が変わったという方が急増中！」

グングン「最近、伸び悩んでいる方！」

ノビルン「人生がうまくいかない方！」

グングン「絶対に成功したいという方！」

ノビルン「そんなあなたにノビグンX！！！」

グングン「ノビグンXはあなたの人生の成長をお手伝いいたします！」

ノビルン「今なら、販促無料キャンペーン実施中！」

グングン「なんと無料でノビグンXの効能をお試しいただけます！」

グングン「私たちは、あなたの人生応援しま〜〜〜す！」

盛大な歓声。

そこにサイトウ、タナカ、ヤマダ、登場。

以下、歓声がだんだんと田中の怒りの声と重なり、複数人の田中となり、サイトウを責め立てる。

タナカ「サイトウくん！！ 君いったいどういうつもりなの！？ 私はあなたのことを

思っていることがわかんないのかな？ わかないのかな！？ 私だっ

てね、毎回毎回、怒りたくて怒りたいわけじゃないのよ！？ それとも何？ 私

が趣味で君に怒鳴り散らかしてるんだと思ってる？ そんなことあるわけない

でしょ！？ ねえ、ねえねえねえねえ！！

一体、何回怒鳴られないと君は成長しないの！！！？ なんで君は何時までた

っても謝るってことをしないの！？ 悪いことをしたら謝る！ これ、社会人

としての常識でしょう！」

タナカの怒りにへとへとになっているヤマダとサイトウ。

ヤマダ「先輩！ これもうどうにもなんないですよ！」

サイトウ「そんなこと言ったって！ どうすりゃいいんだよ！？」

そこにノビルンとグングン。

ノビルン「そんなあなたにノビグンX！！！」

観客たちの声、遠のいていく。

サイトウ、突然、元気になる。

サイトウ「おお、なんだこれ！ 今の俺なら、やれる気がする！」

サイトウ、ものすごくテキパキと謝罪する。

サイトウ「申し訳ございません！ 大変失礼いたしました！ ごめんなさい！ このよう
なことは二度とないようにいたします！ 大変申し訳ございませんでした！
ご容赦ください！」

この通りでございますうううううううう！！！！！！」

サイトウ、最後にものすごく綺麗な土下座。

観客たち、いつの間にかいなくなっており、その場にはタナカとヤマダのみである。

タナカ「(土下座姿のサイトウを見ながらため息)・・・いいよ。そこまでしなくて。以後、
気を付けるように！」

タナカ、退場。

ヤマダ「先輩、やったじゃないですか。どうしたんですか今のいきぎい謝罪！ 普段優
柔不断でなよなよしてる先輩じゃ絶対にできないのに！」

サイトウ「お前、失礼だね。わかんないけど、なんか、もう、こうするしかないって覚悟が、
決まったっていうか、ここで腹くくらないとダメだっと思ったんだよ」

ヤマダ「さっき飲んだ栄養剤のせいですかね？」

サイトウ「そんなわけないだろ」

ヤマダ「ですよ。でもま、先輩が軽傷で済んでよかったです。じゃあ、私先戻りますね」

サイトウ「(デートに誘おうとして) あ、あのさ」

ヤマダ、去る。

サイトウ、大きなため息。

そこに、ノビルンとグングン登場。サイトウと会話しながら距離を詰めていく。

ノビルン「どうでした？ ノビグンX」

サイトウ「あ」

グングン「効果抜群だったでしょう？」

サイトウ「(歯切れが悪い) ああ、うーん・・・」

ノビルン「いつもの自分とは違う感じがしませんでした?」

グングン「普段の自分とは違う行動ができませんでした?」

ノビルン「成長、感じました?」

サイトウ「ああ、えーっと、そうね。感じました」

ノビルン「それはよかった!」

サイトウ「(だんだん早口になっていく) なんか、いつもは自信ないんですよね、俺。自分では自分で自信ないと思うていないし、普通だっと思ってるんですけど、なんか、やっぱ、ああいうピンチになった時に固まっちゃうっていうかどうしたらいいのかわかんなくて、なんか俺、人をイラつかせるみたいなんですよね。特にこーう、目上の人を? 取引先のおっさんに怒られるし、課長に怒鳴られるし。でも、謝るのもなんか違うなあって思うんで。でも、謝らないと余計怒ってくるし、どうしたらいいのかよくわかんなくなるんで、何も言い返せなくて、言い返そうとしてもタイミグとか悪くて、状況悪化するし。あ、でも――」

ノビルン「(遮って) 定期購入されますか?」

サイトウ「は? え?」

グングン「定期購入」

ノビルン「今ならお得にしておきますよ」

サイトウ「どうしよっかなあ」

ノビルン「ほかに悩んでることとかありません?」

グングン「そういうのも解決できるかもしれませんよ」

サイトウ「ほかに・・・(思い当たることがある) あ、恋愛にも効きます?」

ノビルン「あ、そういうことなら担当者が変わります!」

サイトウ「は?」

コイワズ、レンレン登場。

薬箱のようなものを持っている。

コイワズ「どうも、こんにちは!」

サイトウ「あ、はい、こんにちは」

コイワズ「私たち、こういうものです!」

名刺交換。

サイトウ「・・・(名刺に書かれた文章を読む) 叶わぬ恋のお手伝い。素敵な愛をあなたの手に」

コイワズ「コイワズと」

レンレン「レンレンと申します！」

サイトウ「(名前に対して) そういう方針なんですか？」

コイワズ「(聞いていない) 素敵な恋愛、したいですか？」

サイトウ「(だんだん早口になる) え、あ、まあ、したくないって言う人はいなくないですか？ でも、ほら最近、物価高くなってきてるし、恋愛するにもお金かかるじゃないですか、だからどうしてもそういうのに消極的になるって言うか、いや、勇気がないわけじゃないんですよ、ただお金かかるじゃないですかっていう」

レンレン「気になる人がいるとか？」

サイトウ「(変な声のトーンになって早口に) まあ、いない、わけじゃない、ですよ、いや、気になる人がいたら、自分から行きますよ、子供じゃないんだし、だって、ほら、いい大人ですから、いい大人ですけど、なんか、こう、勇気出ないときってあるじゃないですか。そういうのって、あるじゃないですか？ ないですか？ ありますよね？」

コイワズ「そんなあなたにはこれ！」

コイワズ、薬箱からグミっぽいものを取り出す。

コイワズ「100%自社開発、安心の国内生産！」

レンレン「効果は絶大！ あなたの恋を成就させる秘密のお薬！」

コイワズ「恋愛成就必勝薬、コイレんV！！！！！」

サイトウ「(遮って) わかりました、もらいます」

ノビルン「あ、そちらの品についてはですね・・・」

コイワズ「無料販促やってないんですよ」

サイトウ「え、そうなんですか？ いくら？」

レンレン「えっと、こちらになります」

レンレン、電卓を取り出してサイトウに見せる。

サイトウ「高っ！！！！ え、一つで？」

コイワズ「一つで」

サイトウ「それは、ちょっとぼろすぎじゃない？ (ノビルンに向かって) じゃあ、さっきの定期購入いくらなんですか？」

グングン「こちらになります」

グングン、電卓をサイトウに。

サイトウ「・・・マジか」

コイワズ「どうしますか？」

サイトウ「ええ・・・。いやあ、でも、栄養剤ごときにそんな金額はちよつと・・・。ちよ

つといいお店行けるもの、その金額」

レンレン「とか何とか適当な言い訳するから恋愛に消極的になるんじゃないですか？」

ノビルン「仕事と恋愛、人生において大切な醍醐味ですよ？」

グングン「これをきっかけに両方手に入れてみるのはどうですか？」

コイワズ「これはチャンスなんですよ！」

レンレン「こんな良き日は二度と来ないかもしれませんよ！」

ノビルン「家帰ってYouTube見るんでしょ？」

コイワズ「モテる男のなんちゃらってチャンネルですか？」

グングン「それとも、仕事ができる人のなんちゃらですか？」

レンレン「そんなの見てる暇があったら——」

そこにヤマダが通りかかる。

帰りの恰好。

ヤマダ「あれ？ 増えてる。（からかう感じで）何やってんすか？ モテモテじゃないっ

すかあ。ま、楽しんで、じゃお先に、お疲れ様でーす」

ヤマダ、去る。

サイトウ、ヤマダの後姿を眺めて、

サイトウ「（至極当然に冷静に）買います。とりあえず十個」

コイワズ「ありがとうございます！」

サイトウ「（ノビルンに）あと定期購入もさせてください」

ノビルン「ありがとうございます！」

販売員たち、サイトウに商品を渡す。

販売員たち「ご購入、誠にありがとうございます！」

ノビルン「あ、これ、使用説明書になります」

販売員たち「素敵な人生、応援してます！」

販売員たち、去る。

サイトウ、商品を見て、

サイトウ「よし」

軽快な音楽。

1・【仕事褒められるサイトウ】

タナカ、登場。

サイトウに何かしかりつけるタナカ。

サイトウ、ノビグンXを飲む。

何か企画書を差し出すサイトウ。

タナカ、それを見て驚く。

自慢げなサイトウ。

タナカ、サイトウをほめる。

タナカ、去る。

取引先（複数人登場）、サイトウをずらりと取り囲む。

サイトウ、ノビグンXを再度飲む。

サイトウ、取引先に何か言われるが、華麗なる土下座をする。

驚く取引先、なぜか喜び、サイトウと握手をして喜びの表情。

取引先たち、去る。

2・【恋愛うまくいくサイトウ】

ヤマダ、登場。

サイトウ、何か話しかけようとして躊躇する。

ヤマダ、何かサイトウに挨拶して去ろうとする。

サイトウ、コイレンVを食べる。

サイトウ、ヤマダの手を握る。

ヤマダ、驚く。

サイトウ、ヤマダを連れ立って二人で去る。

すぐにサイトウ再登場。女性に囲まれ、チャホヤされている。

音楽、収まっていく。

販売員たち、再び登場。

ノビルン「この栄養剤はただの栄養剤ではありません！」
グングン「あなたの人生を飛躍的に向上することが可能となります！」

コイワズ「効果は抜群、しかし！」

レンレン「頼りすぎにはご注意を！」

ノビルン「薬飲んで食べて、なんでもうまくいくほど」

グングン「人生は甘くないんですから」

コイワズ「良い薬は得てして不味い」

レンレン「おいしい薬に」

販売員たち「ご用心」

販売員たち、去る。

サイトウ、登場。

手にはノビグンX。

サイトウ、ぐびっと一飲み。

サイトウ「(気合を入れて) よっしゃ！」

サイトウ、電話を掛ける。

サイトウ「どうも！ お世話になっております！ 嫌だなあ、そんな声出さないでくださいよ。ええ、例の件でお電話した次第です。どうでしょう、お考えはまとまりましたか？ (何か否定的なことを言われる)・・・え？ あ、いや、先日は・・・はい、はい・・・いやいや、ちょっと待ってくださいよ。なんで？ え？ 私の態度が？ (だんだんもごごし始める)・・・何ですか？・・・あ、いや、それは、でも・・・はい、はい。いえ、私の一存では決められませんので、上長に確認を・・・はい。はい。失礼いたします」

サイトウ、電話を切る。

サイトウ「・・・あれ？」

ヤマダ「(声のみ) せんぱい！」

サイトウ「！」

サイトウ、コイレンVを食べる。

サイトウ「(気合を入れて) よっしゃ！」

ヤマダ、登場。

ヤマダ 「先日はごちそうさまでした。先輩、いいお店知ってますね」

サイトウ 「顔を見れず、小声で」まあ、ね」

ヤマダ 「また連れてってくださいよ」

サイトウ 「おう、いいよ」

ヤマダ 「あ、今日、プレゼンでしたよね？ 最近調子いいんだから、頑張ってくださいね」

サイトウ 「おう、任せとけ」

ヤマダ 「それじゃ、またあとで」

サイトウ 「あの・・・」

ヤマダ、去る。

ヤマダの手を取ろうとするサイトウ。しかし、すり抜けてしまう。

サイトウ 「(自分の手を見て) あれ？」

サイトウ、ノビルンXを再び飲む。

サイトウ 「よし・・・」

プレゼン会場。

上役に取り囲まれるサイトウ。

緊張するサイトウ。

サイトウ 「失礼します！」

上役1 「おお、君の噂は聞いているよ」

上役2 「鳴かず飛ばずの成績だった君が」

上役3 「ここ最近、とても優秀な成績を残しているようじゃないか」

上役4 「君のプレゼンを私たちも楽しみにしていたんだ、」

上役たち 「さあ、始めてくれたまえ！」

サイトウ 「(上ずった声で) は、はい・・・、ま、まずは、こちらの資料を・・・」

必死にプレゼンするサイトウ。

しかし、うまくいかない。

上役たち、呆れた様子。

サイトウ 「あれ・・・？ なんで・・・？」

ヤマダ 「(飛び込んできて)先輩! 課長が!」

サイトウ、ノビルンXを飲む。

そこに激怒したタナカ登場。

タナカ 「サイトウ!!!!!!」

暗転

明転

サイトウ、呆然としている。

サイトウ、ふと、コイレんVを取り出し、食べる。

そしてスマホを取り出し、誰かに連絡する。

連絡が取れない。

コイレんVを食べる。

連絡が取れない。

コイレんVを食べる。

イライラしてくるサイトウ。

コイレんVを食べる。

連絡が取れない。

コイレんVがなくなる。

サイトウ「え・・・あれ・・・?」

呆然とするサイトウ。

そこにヤマダ登場。

ヤマダ 「あ、こんなところいた」

サイトウ「・・・」

ヤマダ 「大丈夫ですか?」

サイトウ「・・・」

ヤマダ 「せんばーい!」

サイトウ、はつとして、ヤマダの顔を認識すると、反射的に立ち上がり、コイレんVを取り出そうとするが、空っぽなことに焦る。

ヤマダ 「先輩?」

サイトウ「・・・ダメだ」

ヤマダ「大丈夫ですか？」

サイトウ「(はっとして) 大丈夫、大丈夫だから」

ヤマダ「最近、顔色悪いし、ちゃんと食べてます？」

サイトウ「大丈夫だよ。食べてる食べてる。(だんだん早口にぼそぼそと) 何、そんなに心配なの？ そりゃあ、顔色悪いかもしれないけど、しょうがないじゃん、こういう顔色なの、俺は。大体、いつも健康で血色よくって、白い歯でハハハと笑うやつの方が人生謳歌してそうな感じがするけどさ、でもさ、俺は、こういうの、俺は、こういう顔色したやつなの、だからさ——」

ヤマダ「あ」

サイトウ「え？」

ヤマダ「いつもの先輩だ」

サイトウ「は？」

ヤマダ「ちよっと前から調子よかったから心配してたんですよねえ」

サイトウ「心配？」

ヤマダ「いや、調子よくないのがデフォじゃないですか」

サイトウ「馬鹿にしてんのかよ」

ヤマダ「あ、そうそう、その不貞腐れた感じが先輩っぽいっす」

サイトウ「どう見ても凹んでる先輩に向かって言うことか？」

ヤマダ「先輩なら後輩に凹んでる姿見せないでくださいよ」

サイトウ「ああ、確かに」

サイトウ、ヤマダ、二人で笑い合う。

ヤマダ「あ、課長、また激おこでしたよ」

サイトウ「ああ、最悪だ・・・」

サイトウ、ノビルンXを取り出す。

ヤマダ「この間のやつですか？ 景気づけにぐっと？」

サイトウ、ノビルンXを見つめて、ヤマダに手渡す。

ヤマダ「え？」

サイトウ「うまいよ。すげえうまい」

ヤマダ「いいんですか？ なんか、パワーがわいてくるとか言ってませんでした？」

サイトウ「あぁー……（何かに納得して）うん。多分、気のせいだ」

ヤマダ「え？ プラシーボであんなになれるんですか？ それは幸せ者ですね」

サイトウ「うるせえ」

ヤマダ「まあ、頂いときます。じゃ、私先行ってますから」

サイトウ「（ヤマダを呼び止める）あのだ……今度、デートしよう」

ヤマダ「（少し照れて）じゃあ、この間のは何だったんですか」

ヤマダ、去る。

サイトウ、どこか嬉しそうである。

タナカ登場。激おこ。

タナカ「あのだ！ 君はどれだけ私に迷惑かければ気が済むの！？ ここ最近、調子よか

ったけど、こんなことがあるようじゃあ——」

サイトウ「（誠心誠意）すいませんでした」

タナカ「だから、私の話を、って、え？ うん？」

サイトウ「申し訳ありませんでした」

タナカ「いや、そんな真つすぐ謝らないでくれる？ 土下座すればいいじゃん」

サイトウ「いえ、やっぱり謝罪はちゃんとしないうちかと思ったので」

タナカ「（どこか嬉しそう）ふうん。まあ、いいんじゃない？ でも、それはそれだから。

ちよつとこち来て」

タナカ、去る。

サイトウ、一つ深呼吸をしてタナカの後に続く。

C M。

観客登場。歓声。

販売員たち登場。

ノビルン「効果は絶大、あなたの人生の調整と生育をお手伝いする！」

ノビ~~ル~~グン「人生生育調整剤ノビグンX！……！！」

レンレン「効果は絶大！ あなたの恋を成就させる秘密のお薬！」

コイ~~ル~~レン「恋愛成就必勝薬、コイレ~~ン~~V！……！！」

ノビルン「もう少し、勇気が欲しいあなたに！」

グングン「いつでも活力が欲しいあなたに！」

コイワズ「あの子に振り向いてもらいたいあなたに！」

レンレン「きっかけがほしいあなたに！」

ノビルン「あなたの人生を」

コイワズ「あなたの恋を」

販売員たち「応援いたします!」

レンレン「け・れ・ど」

ノビルン「常用服用ご用心」

グングン「どれだけ飲んで食べたとしても」

コイワズ「あなたの人生それだけで」

レンレン「なんでもかんでもうまくいく」

ノビルン「そんな都合があるわけない」

グングン「都合のいいこと悪いこと」

コイワズ「なんでもかんでも飲み込んで」

レンレン「何度も嘔んで飲み込んで」

ノビルン「そうしてようやく育ってく」

グングン「すすすすくすすく育ってく」

コイワズ「大言壮語吐き出すよりも」

レンレン「ぐっと飲んで下してみれば」

ノビルン「それはあなたの血肉となるだろう」

グングン「酸いも甘いも飲み込んで」

コイワズ「ハハハと笑って歯を見せよう」

レンレン「ハハハと笑えば葉も育つ」

ノビルン「グングン育って、花も咲く」

グングン「あなたの花も、いつか咲く」

コイワズ「花咲くために」

レンレン「大いに飲んで」

ハ人「育って、まいりましょう」

ヤマダ、登場。

ノビルンXを持っている。

ヤマダ、ノビルンXを飲む。

ヤマダ「・・・まずっ」